



中高生とともに差別と闘う

『十代学びの瞬間（とき）』

吉成タダシ（うずしおランチ代表）



十代学びの瞬間（とき）
前号で中学生集会のまとめを終えるつもりだったのですが、どうしても紹介したい感想があるので紹介させていただきます。中学生集会を卒業して一〇年以上が経ち、今は広島で働いているマオです。

この度は、五月の実行委員会や前日の夕食会も含め、参加させていただきありがとうございます。

まず、集会そのものの感想を書きます。

全体会に入る前の狭山事件・石川さんの追悼動画、これを流すことを決めた学生の皆さんに感謝しました。今年の三月に石川さんのニュースを見た時、「いったいどれだけの若者がこの事件について知っていて、この報道に注目するだろうか」と感じたことを思い出しました。恥ずかしながら、たぶん私だって、学生時代の学習がなければそんなこと気にも留めなかったんだらうと思います。

大人になって感じることはありません。この世の中には、人権問題とされる課題がたくさんあります。ここ数年のインバウンド増加が国籍・民族差別を、身近なトイレや銭湯を覗けばジェンダー問題を、いじめ問題なども近年の象徴といわれる人権問題でしょう。ですが、部落差別（問題）って聞かないんです。目にしないんです。こんなにみんな差別に敏感な世の中なのに。

これってどうしてだろうって考

えていました。私の肌感でしか捉えられないので間違っていたらすみません。「世間話」「井戸端会議」などという言葉があります。特にアルバイトの方とお話ししていると、何でそんなことまで知ってるの？ってことを知ったりします。「あそこ家族、なんか感じ悪い」「あそここの家とは、関わらない方がいいらしい」

そんな言葉の裏に隠れてしまっているのが、部落差別ではないかと私は思うのです。なぜ、その地域出身の人と関わらない方がいいと言われているのか、その歴史を、誤解を知ろうとしないのです。その話題を出すことはいけないことだと、深く考えようとしなかったと思うんです。

何十年も生きてきた人の考え方を変えるのは難しいです。違うといっても軽く流されて終わります。だからこそ、学生の皆さんが部落問題について考えることって、とても大切で、将来の自分を守るために必要だと思えます。

私も今回、この集会に参加することをパートナーに伝えた時、ほんやりと「人権の集会だよ」と言うことしかできませんでした。学生の頃はあんなに自信を持っていた人権集会へ行っていたのに、そんな自分にショックでした。この機会に、ニュースの出来事を交えて話してみようと思います。

語りたい欲が溢れすぎて自信満々に手を挙げる子、勇気を出して少し弱々しく手を挙げる子、みんなが発言しやすいように無言の

間を繋いでくれる子、手を挙げるか悩んでいる近くの子を励ます子、マイクを持つ人へ熱く、真剣に、時に見守るように見つめる子……。いろんな学生さんがいました。その子たち全員がとても格好良かったです。語り合うパワーってすごかったんだって思い出しました。

今年の健康診断の血液検査の結果が良かったら、献血にも行こうとも思いました。将来欲しいと思っている子どものことも考えました。祖父母・親・弟のこと、パートナーのことも考えました。

最後に、皆さんへのメッセージで終わりにします。

〈中学生の皆さんへ〉

皆さんの人の前で手を挙げることは、とても緊張したと思います。今回惜しくも手を挙げられなかった人も正しいと思います。そのどちらとも正しいとお姉さんは思います。手を挙げた人は、その前のめりの姿勢と自分の言葉で伝えられたことを。手を挙げられなかった人は、緊張や言いたくないという気持ちに嘘をつかなかったことを、褒めてあげてください。何でも言える人はすごいですが、何でも言うことが正義な訳ではありません。でもどちらの人にも、間違いがあってそれは正していけるような大人をめざして欲しいと思います。キミたちはとても若い！お姉さんは羨ましいのです（笑）。

〈高校生の皆さんへ〉

まず、一人一人が個性強すぎて面白すぎますので、是非そのまま素敵な社会人になってください。

自分の将来を考えろ、社会人として当たり前を受け止める、と言われて難しい時期だと思います。そんな時でも中学生のために、格好いい姿を見せてくれようとする皆さんは、これまた格好良かったです。一歩引いた立ち位置で、会を作ってくれてありがとう。この先の未来を生きていくときは、常に自分を大切に。息抜きもしてください。

〈先生方へ〉

十年以上経っても、県外へ出て、関わりを途切れさせないでいてくれて、ありがとうございます。中学生集会を支えてくださり、ありがとうございます。今回初めましての先生もおられました。この先またご縁が深まっていますが、この先またご縁が深まっています。私にできることがあれば、ご協力させていただきます。

＊

もっと早くにすべきことは、これでした。それに気づくまでに、どれだけ多くの大切な人材を失ってきたか。取り戻すことはできませんが、その反省として、いま人権こども塾があるのだと思っています。人権については学ぶことは、一年間では無理です。中学三年間でも無理です。人それぞれが、それまっせんが、中高の十代の学びが、それ後の人生において大きな意味を持つのだと思います。だからこそ私たちは、人権こども塾をするのです。それが、私たちの生き方です。

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ

T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

板中生とT中生の交流全体学習① ～平行線で手をつなぐ語り合いの部落問題学習～

板野中学校で全体学習がスタートして10年目を迎えた1999年5月29日（土）、研究指定校として同和教育に取り組んでいたT中学校の全校生徒（以下：T中生）に私が担任する板野中3年A組（以下：板中生）が招かれ、T中学校の体育館で、T中生に部落問題学習を公開し、その公開授業を受けて、板中生とT中生が語り合いの部落問題学習（以下：全体授業）を実施した。

この全体授業の冒頭におけるT中生の発言は、板中生の語り合いを否定する発言が続くが、板中生はひたむきに自分の思いや願いを伝えていく。

部落問題学習の大切さと、必要性を訴え続ける板中生と、中学生には部落問題学習は必要ないという発言を繰り返すT中生との語り合いは、平行線であったが、段々と互いの意見を受け止めていく雰囲気生まれていき、両校の生徒の中に、段々と互いの仲間の意見を受け止めていこうとする雰囲気が芽ばえていく。それは平行線で手をつないでいく語り合いであった。

板中生にとって、このT中生との全体学習（公開授業と全体授業）は、とてつもなく大きなものを残している。なかなか意見がかみ合わない平行線の語り合いを決して諦めることなく、多様な思いを伝えていった板中生とT中生の語り合いの記録のすべてを紹介したい。

まず、全体授業の冒頭でのT中生の訴えである。

T・A（T中）の語り

「こんな勉強するより良い友だちをつくって差別を吹き飛ばせばスカッとする」

板野中学校の子はすごいと思うけど、俺から言わせてもらえれば、まだ14歳や15歳にしかない自分たちが部落問題を考えても難しいし、はっきり言って「自分は差別をしない」と思っているだけでいいんじゃないかと思います。部落問題は年をとらないとわからないと思うし、たった14歳や15歳で悟っても大した結果にならないし、答えがでるわけでもないし、自分は差別をしないと思っていたら、なくなるまではいかないけど、差別は減っていくと思います。先生たちも14歳や15歳の時に部落問題を勉強したときは、部落問題についてわからなかっただろうし、実際今の先生の年にならなければわからなかったと思います。14歳や15歳はこんな勉強するより、もっと良い友だちをつくっていっぱい遊んで、そういう差別を吹き飛ばせるようにしたらスカッとすると思います。

H・B（T中）の語り

「わざわざこんなに集まって部落問題を勉強しなくてもいいと思う」

僕はわざわざこんなに集まって部落問題を勉強しなくてもいいと思います。その理由はちょっと部落問題の勉強して、自分で差別はせんようにしたらいいことだと思うからです。

K・C（T中）の語り「差別っていうのは、僕らの時はあんまり考えんでもいいと思う」

差別っていうのは、僕らの時はあんまり考えんでもいいと思います。子どもはこういう場があるから心配ないと思うけど、大人がしっかりやっていったらいいと思います。自分以下を求める心でテストの時、勉強をやっている人と、やっていない人がいて、やっている人がやっていない人というのは仕方ないと思うし、僕は運動があまり得意じゃなくて、運動のことに関して言われると、何も言えんから、そういうのは自分以下を求めているのではないと思います。

T・A（T中）の語り

「両方やらされたら、子どもは忙しくて頭を抱えて、いじめや人殺しをするようになる」

さっき言われた人がありましたけど、誰も部落問題や自分以下を求める心を勉強しなくていいというわけじゃなくて、教科の勉強とその道徳的なものを両方一生懸命頑張るということは、難しいと思うから、どちらかを優先しないといけないと思います。教科の勉強するなら勉強するで、道徳するなら道徳するで、どちらか一つにしばった方がいいと思います。両方やらされたら、それこそ今の子どもは忙しくて頭を抱えて、いじめや人殺しをするようになると思います。大人は道徳の勉強を教えるなら、もっと教育を変えたらいいと思います。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」 うずしおランチ共同代表 森口 健司